

第3回福山市学校教育環境検討委員会

1 日 時 2014年（平成26年）3月26日（水） 9:30～11:30

2 委 員

◎委員長, ○副委員長

名 前	役職名	名 前	役職名
◎秋川陽一	福山市立大学教育学部教授	森美智代	福山市立大学教育学部准教授
○永井純子	福山平成大学福祉健康学部教授	村上勝士	福山市自治会連合会会長
小野明人	福山市民生・児童委員協議会会長	藤井春勝	福山市公民館長会会長
平田誠治	福山市PTA連合会会長	藤原理絵	福山市PTA連合会監査委員
西本紀子	福山市PTA連合会女性部会長	岡本康成	福山市子ども会育成協議会会長
荒木一夫	福山市公立小学校長会会長	飛田洋悟	福山市公立中学校長会会長
松本茂太郎	福山商工会議所副会頭	喜多村祐輔（欠）	福山青年会議所理事長
藤本和士	連合広島福山地域協議会事務局長		

3 概 要

(1) 教育長挨拶

(2) 事務局報告・説明

I 第2回検討委員会の概要

II 望ましい学校規模等に関するアンケート調査について

(3) 審議事項

I 教育効果を高めるための望ましい学校規模等の基本的な考え方について

II 児童生徒にとっての学校での快適な教育環境と最適な教育環境の在り方について

【意見】

《アンケート調査について》

- ・調査対象が、経験豊富な管理職等であるが、日々悩みを抱えながら、現場で奮闘しておられる、若手の一般教諭を対象としたアンケート調査を実施してはどうか。
- ・管理職以外の先生方の意見の方が重視されるべきだと思う。調査対象に挙げられてはどうか。
- ・調査対象である自分は、これまでの教員経験を踏まえて答えている。そういう意味では、バランスのとれたアンケート結果が出ているのではないかと思う。
- ・少人数の学級しか経験したことのない教員が、将来管理職等になることになるので、その年代の教員が学校規模、学級規模をどのように考えているかを知りたい。

《教育効果を高めるための望ましい学校規模等の基本的な考え方について》

- ・教育効果を高めるための望ましい学校規模等については、今後の子どもの減少を見通した議論に

ならなければならない。

- ・教員の人数は、30代から40代の数が少ない。教員の人数が今後、どう推移していくのかも踏まえて考えていかなければならない。
- ・子どもにとって学校教育環境となると、ある一定の人数が必要ということになる。地域としては寂しいが、統廃合という意見も前面に出して考えていても良いのではないか。
- ・学校規模の課題については、地域課題をきちんと踏まえて、その校区、保護者、地域の人がどういう願いをもっているかをとらえて検討する必要がある。

《望ましい学校規模について》

- ・子ども達の育ち、効果的な教育のために適正規模を考えるというのは当然のことだが、教員の問題でもあるということがアンケート結果に出ている。ある程度の学校規模がないと、教員のチームワークもとりにくく、校務分掌についても、教員の人数が少ないと負担が大きいということである。
- ・小規模の学校では授業時数は少ないが、一人当たりの校務分掌が多く、負担が大きいようだ。
- ・学校規模でみると、適正規模は、小学校では、1学年当たり2から3学級という結果になっている。子どもどうしの人間関係や社会性の育成ということから、また、学年の教員どうしの研修ということからも、この規模が望ましいということかと思う。
- ・小規模校については、2つの学校で一緒に修学旅行に行くなど、小規模校であることを克服するような手立てを考えていく必要がある。
- ・子ども達は、授業やクラブ活動などで切磋琢磨し、いろいろな人とふれあうことが必要であり、小規模校では、他校との交流を行うなど、創意工夫が必要なのではないか。
- ・大規模校になるほど、1学級当たりの人数も40人近くになってくるため、先生の目が行き届かず、生徒が集中しないという話を聞く。

《望ましい学級規模について》

- ・アンケート結果は、1学級26人から30人が一番望ましいということになっているが、若い教員は、もっと少ない方が指導しやすいということになるかもしれない。
- ・アンケート結果について一番興味深く思ったことは、1学級の望ましい児童生徒数については、1番回答が多かったのは25人から30人と小中学校共通だが、2番目は小学校では21人から25人、中学校では31人から35人という結果で、小学校と中学校では適正規模の考え方には質的な違いがあるのではないかと思った。中学校は集団活動の中で、自己肯定感を高めていき、小学校は個に応じた教育を行うということでこのような差が出ているのではないかと、興味深く感じた。
- ・小学校と中学校では、望ましい学級規模についての考えが異なるということについて、小学校では学級担任を中心に指導していくので一人ひとりの子どもに目が行き届いた方が良い、また、中学校では集団の中で主体的に考え、力をつけていく、という観点でもう少し人数がいた方が良い、ということかと思う。

《人的環境の整備について》

- ・記述式の回答は、現状を推測することにおいては大変重要であり、人的環境に関する課題が見えてきているのではないかと思う。1学級の人数が増えると、事務量が増え、保護者対応が増えるということだから、教員の負担を軽減するため、人的環境の整備をなんとかすれば、解決することも多いということが考えられるのではないかと思う。
- ・小小連携、小中連携を進めていく上で、学校間のネットワークづくりや、児童生徒間どうし、教員どうしの交流・行事を仕組む役割を果たす、コーディネーターの存在が必要なのではないかと思う。

《学校施設の整備について》

- ・学校は、地域コミュニティや防災の拠点となる。学校施設を、もっと地域に開かれた活用をしていったら良いのではないか。
- ・今後の少子化・高齢化を踏まえ、学校を地域のために使うというフレキシブルな考え方も必要である。

《学校規模が教育効果を高めるための大きな条件だと思うかについて》

- ・小学校・中学校両方とも、大多数が『非常に大きな条件だと思う』という回答である。『あまり大きな条件だと思わない』『全く関係ない』などの回答をした教員は、赴任した学校の教育環境条件の中で、最大限頑張るという教員の自負心からの回答ではないかと思う。

《小中一貫教育推進の取組について》

- ・城北中学校区は、1中4小の大規模中学校区だが、先日、小小連携の取組として、総合的な学習の発表会を、一つの小学校に集まって行った。それぞれの学校の特徴の出た、工夫のある発表で、研修の場としても効果があり、歴史に残る1歩となった。
- ・小中一貫教育の取組の中でどういう課題があるのかについて、基礎基本定着状況調査の小中学校の合同分析を行ったり、不登校に係る指標を作り、数値を見て、小中学校につながる中でどこに課題があるのかを分析したり、挨拶について児童生徒に自己評価や地域アンケートをしたり、小中一貫教育の中での課題把握、克服の試みを行っている。

【まとめ】

○検討委員会において、望ましい学校規模等の協議を進める上で、管理職等だけではなく、若手教員の率直な意見を踏まえることも、教育環境のあり方を求めていく上で大変重要であることから、20代から30代の若手教員を対象にした、アンケート調査（サンプリング調査）を実施することとする。

○次回も引き続き、教育効果を高めるための望ましい学校規模等の基本的な考え方についての議

論を深めていく。

【確認事項】

- アンケート調査について、クロス集計など、より詳細な分析を行う。
- 検討委員会において、望ましい学校規模等の協議を進める上で必要な資料を準備する。